

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年3月30日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520265

研究課題名（和文）チカーノ演劇の境域性とアメリカ先住民文化における語りの伝統

研究課題名（英文）Borderness in Chicana/o Theater and Native American Oral Tradition at a Crossroads

研究代表者

喜納 育江（KINA IKUE）

琉球大学・国際沖縄研究所・教授

研究者番号：20284945

研究成果の概要（和文）：

チカーノ(ナ)演劇をアメリカ先住民文化の語りと比較し、文学的特色、アメリカ文学研究における意義、アメリカ社会および文化の表象へ与える影響などについて究明した結果、チカーノ演劇の中でもシェリー・モラガなど女性作家の作品は、「土着性」や「境域性」などの概念を通して先住民女性の伝統や文化的経験を共有する一方、現代アメリカ社会におけるチカーノ独自の民族的・性的アイデンティティの表現を模索している。

研究成果の概要（英文）：

This study, exploring socio-cultural significance of Chicana/o theater in literary studies and American society, finds that Chicana playwrights, Cherríe Moraga in particular, share indigenous women's tradition and cultural experience with Native Americans in terms of such critical concepts as "indigeneity" and "borderness," while they also attempt to find their original way to express their ethnic and sexual identity of Chicana in contemporary American society.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：アメリカ文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：アメリカ文学、アメリカ演劇、チカーノ文学、チカーノ、Gloria Anzaldúa、Cherríe Moraga、アメリカ先住民、border

## 1. 研究開始当初の背景

ヒスパニック人口が国勢調査のうえでもアメリカ合衆国最大のマイノリティ集団になった21世紀において、チカーノ（メキシコ系アメリカ人）は、ラティーノと呼ばれる

民族集団と結びつきながらアメリカ社会への影響力を拡大させている。チカーノやラティーノは、アメリカ社会のこれからの政治的動向のみならずアメリカ文化の将来を描くうえで、鍵となる民族集団であると言える。

アメリカのマイノリティの文学は、1960年代以降の公民権運動と連動してそれぞれの集団が「ルネサンス」を迎え、1990年代における多文化主義やポストコロニアル主義などの批評を経て今日の評価へ至った。その「マイノリティ」とみなされるチカーノもまた、1960年代の、いわゆる「チカーノ・ルネサンス」という動きの中で、アメリカ文学の中におけるチカーノ文学の存在を可視化させていった。その初期の過程では、ルドルフォ・アナヤ (Rudolfo Anaya)、ロドルフォ・ゴンザレス (Rodolfo Gonzalez) をはじめとする、主に男性の小説家や詩人の活躍が目立ったが、1980年代以降においては、男性の書き手に加え、グロリア・アンサルドゥーア (Gloria Anzaldúa)、シェリ・モラガ (Cherrie Moraga)、アナ・カスティージョ (Ana Castillo)、そしてサンドラ・シスネロス (Sandra Cisneros) といった女性たち、つまり、チカーノの書き手も続々と文壇に登場し、今日のアメリカでは「チカーノ (ノ) 文学 (Chicana/o Literature)」という呼び方が主流になるほどの活躍を見せている。

本研究では、これまでに進めてきた、「アメリカ先住民文学」および「チカーノ (女性形はチカーナ) の文学」の研究を発展させる形で、チカーノ文学のジャンルの中でも特に「演劇」に着目し、その文学的特色、アメリカ文学という領域における意義、そしてアメリカ社会および文化の表象へ与える影響などについて究明することを広義の目的とした。

## 2. 研究の目的

過去の研究成果で示したように、時代やジェンダーの別を越えてチカーノ文学全体に共通する特色として、「境域性 (borderness)」や「混濁性 (hybridity)」が挙げられる。アンサルドゥーアがその1987年初版の先駆的チカーノ文化論、*Borderlands/La Frontera: New Mestiza* で指摘したように、チカーノの人々は、あらゆる意味で、米墨の境域 (borderlands) に位置してきた。チカーノは、地政治学的には国境や法制度による抑圧の中で生き延びようとする人々であり、人種的には白人と先住民の混血のメスティーソ (サ) であり、言語的には、英語とスペイン語の挟間で表現する人々であり、宗教的にはカトリックと先住民の信仰を混濁させてきた人々である。そしてその人々の言語表現とも言える文学も、これらの境域性を包含しつつ、その独自の伝統を深化させてきたのである。

本研究で注目するチカーノの演劇もまた、こうした境域性をはらむ文学のジャンルである。演劇 (戯曲) が、詩や小説と大きく異なる点は、空間に声や身体が実在し、言葉がパフォーマンスとして立体化していく過程に意味が創造されていくところであるが、特にチカーノ演劇 (Chicano Theater) について言えば、「境域の声と身体」によって立体化された言語表現であると同時に、アメリカ社会の境域で生き延びようと葛藤するチカーノの人々の抵抗やアイデンティティを表現してきたという点で、社会的な意義も深いジャンルである。メキシコ系移民に課せられた劣悪な労働条件や環境に対し、セサル・チャベス (César Chávez) 率いる農業労働者連合 (The United Farm Workers) が政治的抵抗運動を展開した1960年代、それと連携してエル・テアトロ・カンペシーノ (El Teatro Campesino) という劇団を立ち上げ、チカーノ現代演劇の旗手となったルイス・バルデス (Luis Valdez) から、チカーノ・フェミニズムの理論を演劇にして実践したシェリ・モラガ、そして現在全米の至るところに存在するチカーノコミュニティで組織されている「コミュニティ・シアター」など、チカーノ演劇は、さまざまな時代背景のもと、地域の文化やコミュニティのニーズに応えながら発展してきた。本研究では、まずアメリカの社会や文化の「境域」の中で、チカーノ (ノ) 演劇が歴史的にどのような状況と相互作用しながら発展してきたかという足跡をできるだけ具体的にたどる。そのうえで、(1) チカーノ (ノ) 演劇の表現にはどのような特色があるか、(2) チカーノ (ノ) 演劇のもつ境域性が、アメリカの演劇およびアメリカ文学の全体像をどのように再編しうるか、という点を明らかにする。チカーノのアメリカ社会や文化におけるマイノリティとしての位置は、しばしば多文化主義やポストコロニアル主義などの批評理論で、「周縁」、「他者」、「被支配」などという言葉で定義されるが、その位置を「境域性」という概念によって再定義することは、アメリカ文化を「中心-周縁」という二項対立の構図から解放し、その全体像を描き直すことにつながると考えられる。

## 3. 研究の方法

本研究は3年の計画で、具体的に次のような課題を設定して進めた。

- (1) アメリカの演劇史におけるチカーノ演劇の評価についての調査。
- (2) 1960年代 (エル・テアトロ・カンペシーノの出現) 以前のチカーノ (ノ) 演

劇に関する調査。

- (3) エル・テアトロ・カンペシーノとその時代におけるチカーナ（ノ）演劇に関する調査。
- (4) チカーナ（ノ）演劇に影響する先住民文化の語りの伝統に関する調査。
- (5) 1980年代以降のチカーナ（ノ）演劇に関する調査。
- (6) チカーナ（ノ）・コミュニティシアターの社会的意義に関する調査。
- (7) 本研究のまとめ

これらの課題に取り組む具体的な方法として、1) 演劇作品の講読、2) 先行研究の収集、講読、および分析、3) 演劇の上演（あるいは発表）当時の社会背景を示す新聞記事、演劇の劇評、広告記事などの一次資料、古文書の発掘、4) 劇作家、劇団の関係者、識者へのインタビュー、5) 先住民の伝統芸能およびチカーノ演劇作品の鑑賞と分析、6) 論文の執筆を行った。

#### 4. 研究成果

##### (1) チカーナ(ノ)演劇の特色

###### ① マタチネスダンスとアメリカ南西部におけるヒスパニック文化の伝統

アメリカ南西部は、1848年のグアダループイダルゴ条約以前はメキシコの領地であったため、今日もアメリカ先住民やヒスパニックをはじめとする様々なエスニックアイデンティティを有する人々が共生する地域として知られる。例えばニューメキシコ州では、リオ・グランデ川に沿って存在するプエブロ族の十九の「プエブロ（村落）」共同体の近隣に、エスパニョーラや三・アントニオ、サン・アントニートなどの「スパニッシュ」の村落共同体が存在している。今回の研究で理解したことは、まず、アメリカ南西部という「場所」を共有し、生活のあらゆる場面で「混交」し、「共生」しているように見えるこれらのヒスパニックの人々とアメリカ先住民が、文化的にはそれぞれが異なる伝統を維持しており、その「差異」が顕著に表現されているのが、それぞれの文化における儀式的・宗教的パフォーマンスであるということである。

中でも、ニューメキシコ州のヒスパニック系の村落で年中行事的に演じられる「マタチネスの踊り」は、チカーノ演劇の始原を考察するうえで示唆的である。キリスト教徒が先住民族をキリスト教化し、支配する一連のプロセスを劇化したこの儀式劇（Ritual Drama）とも位置づけられるパフォーマンス

では、「スピリット・ダンサー」、「祖先の守護神」、と言われる男性の集団と「マリンチェ」という幼い少女が登場する。この儀式劇において「マリンチェ」は最初にキリスト教に改宗した人物であり、その無垢な天使といった少女の姿で土着の宗教の象徴である雄牛を去勢へと導くことにより、土着の宗教をキリスト教に変え、植民地支配を完成させる、という筋書きである。

この儀式劇に登場する「マリンチェ」は、アステカ文明を滅ぼし、ニュースペインを築いた征服者、エルナン・コルテスの通訳であり愛人であり、後にコルテスとの間に混血の「メスティージョ」を誕生させることによって、メキシコ文化から「裏切り者」または「淫売婦」と蔑まれることになる「ラ・マリンチェ」と同一人物であると考えられるが、劇中では、土着の民をキリスト教に改宗させる立役者であり、高貴で無垢な少女のイメージで表象されている。これは、この儀式劇があくまで征服者側の立場から描かれているという点に起因すると思われるが、歴史的「語り」のどの時点で無垢な少女としての「マリンチェ」が今日誰もが裏切り者の悪女として認識する「マリンチェ」へと変容していったのかについては、さらなる調査の余地がある。

いずれにせよ、マタチネスダンスの観察を通して明らかになるのは、ヒスパニックの伝統的な演劇が歴史的出来事（「スペイン文化による土着の文化の征服」や「キリストの生誕」など）を「再現」する再現劇の特徴を有していたという点である。

###### ② エル・テアトロ・カンペシーノ

ヒスパニック文化の伝統的宗教劇の特徴である「物語の再現」は、20世紀のチカーノ演劇にもつながっていく。1960年代、チカーノ現代演劇の旗手となったルイス・バルデスが立ち上げたエル・テアトロ・カンペシーノ（ETC）という劇団の登場する背景には、セサル・チャベス率いる農業労働者連合が、メキシコ系移民に劣悪な労働条件や環境を課すアメリカ合衆国の資本主義に対して行った政治的抵抗運動があった。

ヨランダ・ブロイレス・ゴンザレスも指摘するように、その特徴である *acto* と呼ばれる即興劇の要素は、ブレヒトなどの演劇にもすでにあったものの、バルデスは ETC の中でそれを独自のスタイルへと変容させている(4)。すなわち、演者も聴衆も農業労働者たちであるというバルデスの ETC は、何をにおいても政治的抵抗運動を表現する大衆演劇として発達していったのである。

ETCの俳優たちが即興で演じたのは、雇用主と労働者の日常のやりとりであったが、その多くは労働者の視線を主体として雇用主を揶揄するコメディだった。すなわち、ETCは、儀式劇や宗教劇の「再現」という特徴も有していたと言える。ゴンザレスは、バルデスのETCのルーツとして、200年もの歴史をもつメキシコの大衆演劇カルパ(*carpa*; テント内演劇)の存在を指摘し、労働者の素朴な人間味にあふれるカルパの表現を「カルパの伝統あるいは美学」と呼ぶ(10)。ゴンザレスはさらに、カルパのもつ表現力は、メキシコ文化にある「口承の語り(*oratory*)」に深く関っており、その口承の文化を存続させるものが「記憶」であり、その記憶を伝える道具となるのが演じる者の「身体である」と言う(15)。

「口承伝統」はアメリカ先住民にとっても記憶を伝える語りの伝統であるということから、人間の感情や身体のありようをストレートに表現するメキシコの大衆演劇をルーツに持つチカーノ演劇も、アメリカ先住民の語りにある「身体性」を共有していると言える。しかし、ETCのような即興劇に見られる「現実を解釈し、再現する」という特徴は、マタチネスダンスのような儀式劇とも共通しており、その点で、チカーノ演劇には、アメリカ先住民の語りとの接点のみならず、ヒスパニック文化との繋がりも見出すことができると言えよう。

### ③ 大地とつながるアイデンティティ

バルデスなどチカーノ(男性)作家が、チカーノが現代アメリカ社会で直面する苦難を表現しようとしていた一方、チカーナ(女性)の劇作家も、チカーナにとっての厳しい社会的現実を表現しつつも、表現の中心的モチーフは男性作家のそれとはやや異なっており、その最も顕著な例をシェリー・モラガの演劇に見ることができる。

モラガは、1952年、カリフォルニア州オークランドに生まれた。1980年代に私生活でもパートナーであったグローリア・アンサルドゥアと共編で『私の背中というこの架け橋(*This Bridge Called My Back*)』を出版し、「有色女性のフェミニズム(*Women of Color*)」の旗手として認識された後、詩やエッセイの執筆の傍ら、演劇を書き始める。1980年代、カリフォルニアにおいてぶどう農園の農業散布による環境や身体の破壊を描いた*Heroes and Saints*(1994)に登場する、頭部しかない女性の登場人物セレシータは、バルデスの演劇の登場人物にヒントを得て

創造したと述べているが、ホルヘ・フエルタ、エリザベス・C・ラミレス、ティファニー・アナ・ロペスなども指摘するように、モラガは女性であり、クイア(同性愛者)であるというアイデンティティによって、バルデスとは異なる演劇空間や人間の物語を提示した女性劇作家であると言える。

その特徴のひとつを、モラガの演劇表象で繰り返しテーマとなっている「人間と場所とのつながり」に見ることができる。*Heroes and Saints*でも、*Watsonville: Some Place Not Here*(1995-96)でも、中心的テーマを構成しているのは、人間と自然との関係、あるいは人間と場所との関係である。そこには、チカーナ(女性)としてのアイデンティティのありよう、すなわち、グローリア・アンサルドゥアも述べたように、自らのアイデンティティを、(白人の)スペインの文化的遺産の中だけに見出すのではなく、先住民の(褐色の)母の伝統に見出そうとする意志と選択に裏打ちされた「チカーナ・アイデンティティ」が表現されており、ここに、チカーナ演劇のテーマと、アメリカ先住民フェミニズムの連続性が見出せるといえる。

女性としてのアイデンティティにあるこのような両義性、すなわちカトリック文化が理想とする女性像と先住民文化の女性像と狭間で抑圧、また英語とスペイン語の狭間で表現するという状況に、本研究の前にも論じてきた「境域性」が可視化されるが、この「境域性」は、チカーナ演劇においても重要な特徴であることがわかる。

### (2) チカーナ演劇の境域性とアメリカ文学の再編

#### ① シェリー・モラガの演劇

チカーナ演劇のこうした境域性は、アメリカ文学の全体像をどのように変容させていくのだろうか。ここまでの考察では、「カルパ」など、チカーナ(ノ)演劇の独自の美学的特徴の根底にあるのは、歴史や宗教の再現劇の伝統、口承の語りの伝統、そして先住民女性の伝統などであることが理解できた。すなわち、ヒスパニックの文化とアメリカ先住民の文化は、宗教的に、言語的に、また演劇のスタイルという点から様々な異なる要素を複合的に包含することで、チカーノ、特にチカーナの演劇空間それ自体を「境域」へと変化させていくのである。そして、チカーナの演劇空間はさらに異なる要素を含むことによって新たな展開へと進化する。チカーナ演劇を牽引するシェリー・モラガにとって、そ

の「境域」としての演劇空間は、現実と舞台、過去と現在と未来、ローカルな場所とグローバルそして宇宙的空間をもつなぐ。そして、その空間で演じることによって「演劇」をひとつの「儀式」として表現しようとしているようにも思われる。

モラガのめざす「儀式」そしてアクティヴィズムとしての「演劇」への挑戦は今日も続く。モラガは、2012年1月に、本拠地ともいえるカリフォルニア州サンフランシスコのミッション地区にあるブラバシアター (Brava Theater) で約10年ぶりに新作演劇の初演を果たした。*New Fire: To Put Things Right Again* (「新しい火～再び正しくするために」) と題されたこの新しい作品でも、舞台空間は様々な要素をつなぐ「境域」の様相を呈し、その舞台での営みは現実に変化をもたらそうとする「儀式」としてのアクティヴィズムそのもののようにも思われた。劇中では、物語の「意味」を過去から現在へと運ぶ役として、変幻自在の「コヨーテ」を登場させ、過去から変わらず続く女性への暴力を物語る。そして、他の登場人物の「語る」そして「演じる」という行為を通して、舞台上の人物たちがそのような暴力で負った傷を癒していきつつ、その「癒し」の空間を観客と共有するという「儀式」の形がそこにあった。

*New Fire* の特徴として、アフリカの土着の踊りや歌が繰り広げられるが、それはアメリカ演劇で従来認識されてきたミュージカルの形式を踏襲したものではなく、やはり「儀式」における音楽や舞踊の存在を想起させる表現要素と考えられる。

また、もう一つの特徴として、舞台には、女性たちの「傷」の物語の聞き届ける役割として男性の登場人物が置かれた。これは「境域」そして「儀式」たる舞台空間に意図的に男性を参入させることにより、男性を傍観者ではなく参加者へと変容させようとするモラガの表現戦略であった (インタビューより)。このように、「舞台」はさらに「観客」を巻き込むことによって、もはや「舞台」と「観客」の境界線をも消し、一体化していく。従来のアメリカ演劇が「舞台」と「観客」の間に明確な境界線を引いてきたならば、そのような境界線を消そうとする、あるいは越境しようとするモラガの演劇には、従来のアメリカの演劇における「舞台」と「観客」の関係というものへの理解に一石を投じるのみならず、「演じる」あるいは「観る」という演劇的行為の意味を再考することをも促していると言えよう。

## ② 文化的エンパワメントとコミュニティ・シアターの意義と役割

「舞台」と「観客」の関係に対する理解が変容することと同時に、本研究がもたらしたもう一つの知見が、「演者」と「舞台」そして「観客」の関係である。「舞台」は常に「観客」を必要とするのだろうか、という問いには、「演じる」という行為を通して変容する演者の「身体」や「意識」へのまなざしがあるとと言える。

本研究の調査を通して、アメリカ社会では、演劇が時としてコミュニティの文化的エンパワメントに貢献していることがわかった。そのひとつは、演じる者が、演じることによって、自らの現実を解釈したうえで再現し、その再現した現実を新たな現実認識とする視座を得ることができるということである。そして、もう一つが、少数派の観客に対し、少数派の言語で演劇を提供することにより、自らの文化に対する視座を、社会の周縁から中心に置く視座を獲得させるということである。すなわち、アメリカ社会における自らの存在に対する自信やポジティブなアイデンティティの構築へとつなげるこれらのエンパワメントを可能にするのが、コミュニティシアターなのである。

本研究では、ニューヨーク市内の小劇場やニューヨーク近郊でラテン系の人々を中心に構成するプレゴーン・シアター (Pregone Theater)、レパルトリオ・エスパニョール (Repertorio Español)、そして先述のサンフランシスコ市内のブラバシアターなどを調査した。プレゴーン・シアターをはじめ、ニューヨークの小劇場ではしばしばスペイン語のみの演劇が上映されるが、これはニューヨーク市内に多く存在するプエルトリコ系、ラテン系移民のニーズに応えた結果であると言える。アメリカ演劇の市場に、スペイン語の演劇の伝統や言語表現が参入してくることにより、アメリカ演劇そのものにどのような変容がもたらされるのかについては今後も調査の余地がある。

また、サンフランシスコのブラバシアターでは、特に有色人種の女性やレズビアンたちなど、アメリカ社会で抑圧され、声を失い、自己像を見失っている人々に対し、「自己表現」の講座などを開講している。そこには「演じる」のは「プロ」で、演じるのは「聴衆のため」であるという「演者-観客」という構造とはもはや異なる理解が生じていることがわかる。すなわち、「自らのために演じる」という発想によって、演者が演技を通して自

己の身体を回復し、自己意識を再構築するというプロセスによって「自己エンパワメント (self-empowerment)」が促進されるのである。これは文化的・身体的アイデンティティの構築と演劇との関係を示唆するものであり、こうした新しい演劇の役割によって、従来の演劇観へ変化がもたらされるであろうことを予感させる事象であると言える。

<引用文献>  
Broyles-Gonzalez, Yolanda. *El Teatro Campesino: Theater in the Chicano Movement*. Austin: U of Texas P, 1994.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① Kina, Ikue. “Locating Tami Sakiyama’s Literary Voice in Globalizing Okinawan Literature.” *IJOS: International Journal of Okinawan Studies* 2.2 (2011): 11-29. [査読有]
- ② Kina, Ikue. “‘We are an earth people’: Imagining the Planetary through the Community of Mixed Memories.” *Nanzan Review of American Studies* 33 (2011): 221-28. [査読無]
- ③ 喜納育江 「進化するエコ／フェミニズムとクイアエコフェミニズムの可能性」『水声通信』 6.1 (2010):149-52.[査読無]
- ④ Kina, Ikue. “Cherríe Moraga’s Ecofeminist Aesthetics toward Reclaiming Chicana Body in *Heroes and Saints* and *Watsonville: Some Place not Here*.” *Tamkang Review* 40.1 (2009): 77-96. [査読有]

[学会発表] (計 3 件)

- ① Kina, Ikue. “‘We are an earth people’: Imagining the Planetary through the Community of Mixed Memories.” Nagoya American Studies Summer Seminars (NASSS) 2011. July 23-26, 2011. Nanzan University.
- ② Kina, Ikue. “American Studies, Anzaldúan Style: Toward an ‘Emerging Planetary Culture.’” Annual Meeting of the American Studies Association. November 18-21, 2010. San Antonio, Texas.
- ③ Kina, Ikue. “Recontextualizing the Himeyuri Student Corps: New Narrative

Strategies for Remembering the Battle of Okinawa.” Association for Asian American Studies Annual Meeting. April 7-11, 2010. Austin, Texas.

[図書] (計 3 件)

- ① 【単著】  
喜納育江 『<故郷>のトポロジー』水声社 2011年、224頁。
- ② 【共著】  
山里勝己編『<移動>のアメリカ文化学』ミネルヴァ書房 2011年、266頁。(喜納育江「南から北へ～アメリカ南西部境域と先住民の再移動」 pp.21-44 担当。)
- ③ 【共編著】  
石原昌英・喜納育江・山城新編著『沖縄・ハワイ コンタクト・ゾーンとしての島嶼』彩流社 2010年。(喜納育江「第14章・戦後沖縄の公的コンタクト・ゾーンにおける女性の主体性」 pp.283-302 執筆担当。「第13章・米国占領下の沖縄におけるジェンダー・ポリティクス (小碓美玲著) pp.267-82」および「第15章・タフな物語—ローカルの沖縄系アメリカ人軍人の男らしさを語る (タイ・P・カウィカ・テンガン著) pp.303-22」 翻訳担当。)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

喜納 育江 (KINA IKUE)  
琉球大学・国際沖縄研究所・教授  
研究者番号：20284945